

出会う・つながる・動き出す ～みんながけやぐ（仲間）青森で～

第28回地域づくり団体全国研修交流会 青森大会

【レポート】

福岡県広域地域振興課

日永田 一郎

<はじめに>

第28回「地域づくり団体全国研修交流会」は平成22年11月12日（金）～13日（土）にわたって青森県内で開かれ、全国から地域づくりに取り組む実践家や行政関係者など約300名が参加。熱心な討議や情報交換が2日間にわたって行われた。全大会は青森市で、その後参加者は、同県下15分科会の会場に分散し、交流の輪を広げた。

<レポート>

今大会のテーマは「出会う・つながる・動き出す～みんながけやぐ（仲間）青森で～」であったが、そのテーマどおり全国各地からの“けやぐ”がつながった2日間であったと思う。特に、12月4日の東北新幹線全線開業という一大ニュースは、今大会においても前夜祭から繰り返し耳にする話題であり、青森県全体がこの開業のタイミングを好機と捉え、今大会の熱気を加速させていると感じた。降り立った青森の冷たい空気とは逆の“熱い”今大会の模様を報告する。

まず全大会のオープニングは津軽三味線の演奏。津軽三味線全国大会A級チャンピオン3連覇の渋谷和生氏による初めての津軽三味線の生音は、迫力満点だった。津軽三味線の音色は「青森の冬の厳しさを表現している」と例えられたりするが、厳しさも含めた一種の荘厳ささえも感じさせるものであった。

主催者挨拶で地域づくり団体全国協議会岡崎昌之会長、歓迎挨拶で青森県蝦名武副知事、来賓挨拶で総務省の門山泰明地域力創造審議官、財団法人地域活性化センターの丸山浩司常務理事から発言があった。印象的だったのが「東北新幹線全線開業に対しての機運の高まり」、「青森の四季」についてのくだりである。青森の四季は「春夏秋冬」ではなく、「冬、ねぶた前、ねぶた中、ねぶた後」とのこと。会場でも大きなねぶたが飾ってあったが、ねぶた祭りが彼らの大切なアイデンティティのひとつであることを知った。





次に、地域づくり青森県検定というクイズ大会があった。青森県の方なら常識的な問題とのことだったが、「ゴボウ生産量全国1位」、「人口10万人あたりの公衆浴場数が断トツの全国1位」など新しい発見が多くあった。結果はもちろん(?) 惨敗であった。

青森県検定のあとは、次回開催県・熊本県からのPRタイム。前夜祭でもそうだったのだが、印象的であったのが各県の主催者達がよく連携していることである。前年度開催県の佐賀県、今大会の青森県、そして来年度開催の熊本県。それぞれの地域団体の方々が、まるで昔からの「けやぐ」のように交流されている姿を見ていると、「地域は違えど地域づくりする魂は同じ」、「他地域に貪欲に学ぶ大切さ」を感じずにはいられなかった。

りんごやほたてをはじめとする青森県産品をふんだんに使った「青森大会オリジナルカレー」の昼食を挟み、参加者は県下15会場の分科会へ向かう。私もむつ市の第8分科会「自然と歴史的資源を活かした地域づくり」分科会へ移動した。第8分科会は、南は沖縄県から北は青森県まで、総勢25名の分科会となった。

むつ市は青森県北部の下北半島を多く占める広大な市で、青森市内からは車で2時間半程度かかる。分科会への移動の車中では、主管団体である「NPO法人斗南(となみ)どんどこ健康村」の奈良正義会長のお話だけでなく、車窓から見える「防雪柵」や「灯油のホームタンク」なども、いかにも青森県らしい風景で印象的であった。

むつ市到着後、まずは南部裂織(なんぶさきおり)を体験した。南部裂織は古布(着物等)を活用した織物で、冬場の手工業として青森県に昔から伝わる「エコ」な文化とのこと。地元のお母さんにマンツーマンでご指導いただき、小さな小さな織物を一片つくった。お母さんは事も無げに織られていたが、力の加減が難しく、短時間の体験であったが疲れてしまう私であった。ただ、やはり体験を通じたお母さんとの会話は非常に楽しく、特に耳慣れない方言にご当地感を味わうことできた。



体験後は、ホテル内でNPO法人斗南どんどこ健康村の活動報告の説明を受けた。当NPOは平成18年に発足し、主に地元の小学生等を対象に、件の南部裂織やチーズづくり、農業体験等の体験プログラムの受け入れを行っているとのこと。印象的であったのは、NPOメンバーの最年少が60歳代であったこと。地域の高齢化は全国共通の課題であるのは間



違うのだが、彼らは「高齢だから知っていること、伝えられること」を意識して、活動に活かしているように感じた。

今回の研修でもっとも楽しみにしていたひとつの夕食は、期待どおり素晴らしいものをいただいた。「下北のうまいは日本一」というキャッチコピーのとおり、新鮮なホタテやえび、イカ、日本酒など大満足の夕食となった。ただ、同席した地元のお母さんが「ホタテやら日常すぎて、ご馳走でも何でもない」という言葉には苦笑してしまった。

夕食後の「夜なべ談義」では、イタコ・ショーを拝見した。イタコ・ショーは本物のイタコではなく、地元の活動団体のご婦人方が芝居形式で「口寄せ」を再現してくれるもので、ユーモアを織り交ぜたショーは完成度が高く、非常に楽しかった。彼女たちはイタコ・ショーを通じて、自分たちの地域づくりについての意見を訴えているとのことで、上手な情報発信方法だと思った。

そしてこの夜なべ談義では、酒を酌み交わしながら全国の参加者の方々と交流することができた。ウェブを活用した地域づくりに取り組む熊本県人吉の社長、自分の大好きな地元の山の自然を守るために奮闘する福井のおじいちゃん、町歩きガイドのスキルアップのヒントを模索している旅館の女将、「まあ飲まんね」と目が合えば泡盛を勧める沖縄の大将、初めて地域づくりに携わり戸惑いながらも自分に何ができるかを考えていた香川県の行政職員などなど。それぞれの活動の話聞きながら、自らの活動のヒントを得ようとしている姿が垣間見え、夜なべ談義の時間はあっという間に過ぎていった。



翌日の朝は、さすがに冷えていた。地元の方々は「異例の暖かさだよ」と教えてくれたが。

朝食後、恐山へ参拝に行った。日本三大霊場と言われる恐山は、地元では「人は死ねばお山（恐山）に行く」と言い、故人への供養の山として信仰されてきたとのこと。つまり字面からイメージしてしまう「恐怖感」は、地元では皆無であり、むしろ身近な存在として崇められていることがおもしろい。「1杯飲めば10年長生き、2杯飲めば20年長生き、3杯飲めば死ぬまで生きる」と言われる冷水と呼ばれる湧水も旧街道沿いにあり、昔から



日常的に地元住民が参拝していたことがうかがえた。ガイドさんのお話も非常に分かりやすく、単に見るだけでは分からない、「ガイド／インストラクター」の重要性を改めて感じた。



恐山の参拝後、中西建具センター「工房木の夢なかにし」で「時雨彫り体験」。これはむつ市特産のヒバ杉を活用した体験プログラムである。時雨彫りは数ミリ残した木の柾目を生かしてすかし彫りをする芸術品。時間の都合上、残念ながら私は体験することができなかったが、中西社長の強烈なむつ弁の言葉に、ヒバ杉への愛着と職人としての熱い魂を感じることができ、感銘を受けた。



分科会のしめくくりは、観光物産館まさかりプラザでの昼食交流会であった。地元名物の「みそ貝焼料理」に舌鼓を打ちながら、みなさんと会話を楽しんだ。

途中からは、昨日に南部裂織体験を指導してくださったお母さんたちも駆けつけていただき、大勢の関係者のみなさまに見送られながらむつ市を後にした。



「異例の暖かさ」ということで、私自身期待していた「本場・北国の冬」の本格的な寒



さは味わうことができなかつたのは残念であつたが、県庁広域地域振興課に所属する私にとって2つの重要な「気づき」を得ることができた。

「1. ご当地らしさを味わうことはやっぱり楽しい。」

私は今回の全国研修会交流会に出席して、多くの「青森県らしさ」を味わうことができた。それは単純に食事、特産品に限らず、方言、季候、体験プログラム、NPOの方々の熱い想いなど多くのことを味わうことができた。「交流人口の増加」は地域づくりの目的のひとつであるが、地域外から人を呼ぶときに、この「ご当地らしさ」を来訪者へ伝えていくことが重要である。「ご当地らしさ」がない地域なんてひとつもない。それぞれの地域には必ずその「地域らしさ」が眠っているはずである。地域づくりに携わる人は、この「地域らしさ」の掘り起こしと見せ方が重要なミッションのひとつであると思った。

もちろん我が地域のらしさを発見するためには、他地域のことを尊重し、積極的に学んでいくことも重要であると思うし、あるいは私たち県庁職員のような立場の人間が、ある種、俯瞰的に地域を見ることで協力できるのではと思う。

「2. 地域づくりに“交流”、“連携”は不可欠。」

全国研修交流会では多くの地域づくり団体の方々が相互に交流し、互いに学び、互いに刺激を受けていた。それぞれが持っている課題や、行っている活動は異なるものの、「地域をどげんかせんといかん」と思っている気持ちは同じであり、互いに活動のヒントにならないかと「交流」、そして「連携」するのだと気づいた。もしかすると、直接的に活動のヒントは得られなかつた人もいたかもしれない。しかし、地域は違えど全国で活動する多くの仲間と交流することで、自らの活動のモチベーションを上げることができたかもしれない。

さらに私のような行政職員から見ると、このような地域づくりに熱い想いを持っている方々と交流することで、行政に求められていること、行政がお手伝いできることなどが垣間見えてきた気がした。